

月影



第66号

令和二年四月一日発行

浄土宗西山禅林寺派

常林院

比べて悲しむと
自己を見失う
比べて喜ぶと
他を傷つける



比べて得た幸せは
幸せではない

比べて感じた不幸は
不幸ではない

他人にとらわれず
自分だけを見つめたとき

煩いはなくなり
真実が見えてくる

開宗八五〇年 法然上人の生涯



【三】

比叡山



源光上人のもとへ

母と別れた勢至丸（法然上人）は比叡山延暦寺へ向かいます。

最澄（さいちよう）によって開かれた比叡山は、弟子達によって大きく発展を遂げ、当時、仏教に関する学問の中心地でした。

勢至丸の才能を「文殊菩薩の智慧」にたとえた叔父観覚の書状をもって、勢至丸は観覚の知人である持

宝房源光（じほうぼうげんこう）のもとに入門しました。

出家

源光上人はすぐに勢至丸の優れた資質を知り、比叡山の東塔西谷功德院の皇円（こうえん）のもとに転出させました。この皇円のもとで勢至丸は髪を剃り、亡き父の遺言の通り、正式な僧侶になりました。

比叡山での日々

学徳の優れた皇円のもとで、法然上人は次々と学問を修められます。

天台教義の根本を記した「天台三大部」とその注

釈書、全六十巻をわずか三年という速さで読み終えた法然上人は、皇円からゆくゆくは比叡山の「天台座主（てんだいぎす）」になるよう、とまで励まされるほどの存在になっていきました。

消えない煩惱



比叡山の僧侶たち

精進を重ねる法然上人とは裏腹に、当時の比叡山を取り巻く状況は決してよいものではありませんでした。

僧侶の多くは元貴族の子弟で立身出世のための手段になっていたりと、高い

位の要職についている僧侶たちも、家柄や身分によって占められていたり、仏教の戒律を忘れて政治に身をやつす僧侶があふれていました。また、寺院が莊園をたくわえ寺領をめぐって僧兵が争うなど、仏道が忘れられていました。

隠遁修行

そんな状況の中で、懸命に学問に打ち込む法然上人ですが、いくら修行を積んでも、父を殺した仇への憎しみも、様々な煩惱も消えませんでした。悩んだ法然上人は、師に暇を請うて隠遁修行（いんとんしゅぎよう）の道へと進みます。

彩寺記



春の彼岸会

去る三月二十日。当寺の春の彼岸会法要を勤めました。しかし、現在世界中で猛威をふるい感染が広がっている新型コロナウイルスの国内感染状況を鑑みて、今回の彼岸会は住職のみで行ない、法要後の法話は中止としました。

こういう形で法要を行なうことは初めてのことで戸惑いもありましたが、お申し込みいただいた各家の水塔婆の回向をさせていただきますました。

皆様のご健康と、一日も早いウイルスの終息を願うばかりです。



仏教用語



「初心忘るべからず」

「初めの志を忘れてはならない」という意味で知られているこの言葉は、室町時代に能を大成した世阿弥（ぜあみ）の言葉です。この「初心」は、もともと仏教語の「初発心（しょほつしん）」

しよ しん

初心

から来た言葉で「初めて悟りを求める心を発す（おこす）時、正しい悟りへの道は開かれている」という意味です。

世阿弥は、人生の中にはいくつもの「初心」があると言っています。「若いときの初心」「老いて後の初心」「人生時々の初心」。人生を歩む中で初心を思い出すことが、いかに大切であるかということをお教えています。

仏教歳時記



なむあみだ
南無阿弥陀 宗祖つつむ 御忌会かな
しゅうそ ぎよきえ

実山

御忌会とは、浄土宗を開かれた宗祖法然上人の御命日を偲ぶ法要です。

毎年四月二十二日から二十五日まで勤まります。

例年は全国から多くの僧侶、檀信徒の方がお参りに来られるのですが、今年には新型コロナウイルスの感染予防のため、本山の僧侶のみで勤め、本寺の寺院並びに檀信徒の皆様への参拝は、残念ながら中止となりました。



雑記抄 露の身

人生は出逢いと別れの繰り返しです▼子どもの頃は出逢いが多かったのに、大人になるにつれて出逢いよりも別れの方が多くなってきたことに、ふと気がつき、寂しく感じる時があります。出逢いの数だけ別れがあり、別れの数だけ悲しみがあります▼お釈迦さまは、この世には「愛別離苦（愛する人と別れ離れなければならぬ苦しみ）」という苦があると説かれていきます。大切な人といつまでも一緒にいたいとどんなに願っても、必ず別れの時がやって来ます。誰も避けることのできな

い苦しみです▼しかし、法然上人はこの世で別れても、お浄土で再会するのだよと、次の歌を詠まれています。〈露の身は ここかしこにて消えぬとも ころはおなじ はなのうてなぞ〉寒い朝。草の上で露ができます。太陽が昇ってくると露は蒸発し、一つまた一つ、空へ帰っていきます。同じように、私たち人間も寿命を終えて、一人また一人お浄土へ還って往きます。そしてお浄土の蓮の台（うてな）の上で再び出逢うのですよ、という歌です▼私たちは、はかない露の身。今あるご縁を大切にしながら日々を送っていきましよう。